

巻 頭 言

「集いに参加しましょう」

宇田川 芳江

聴覚障害は外見ではわからない。そして、人とかかわる時になると聞こえない・聞こえにくいという壁が突如として出現する。コミュニケーションをする相手には、自分から聞こえにくいことを伝えなければ配慮は得られない。恥ずかしいなんて言っていられない。

1975 年 7 月に岩波書店から発行された『音から隔てられて』編者の一人、入谷仙介氏は、本のまえがきに次のように記している。「聴覚障害はすぐれて社会的な障害である。極言すれば、視力障害者や肢体障害者は、一人きりでいる時でも障害者であろうが、聴覚障害者は一人きりでいる時は障害者でないとさえいえるようなところがある。聴覚障害者の苦悩はそこから始まり、窮極はそこに帰する」。

初めて行った場所で、受付の人に“耳が不自由です”と書いてあるのびパスを見せると、たいていの場合は筆談するものを出して書いてくれる。その内容に声でこたえた途端、もう書くのをやめてしまって普通に話しかけてくることが多い。話せるなら聞こえているはずと思うのだろう。中途失聴者や難聴者にとって、いちばん悩ましいのがこのような受けとめ方をされることだ。中途失聴者や難聴者は、イントネーションを少し間違えていたり、場違いな大きな声を出してしまうこともたまにはあるけれど、とにかく毎日普通に話して生活しているし、それが自然なこと。しかし、そのような障害者の存在や適切な対応方法は、世の中ではまだあまり知られてはいない。

来年 1 月 14 日に八王子の東京たま未来メッセで「第 35 回東京都中途失聴・難聴者の集い」が行われる。2019 年度になかの ZERO で開催したあと、2020、2021 年度はコロナ禍で開催できず、2022 年度は対面とオンラインで実施、今回は 4 年ぶりに対面のみの集いがやっと復活する。

集いは 1 年に一回、皆が一堂に会して楽しみ、交流できる場であると同時に、社会的にも大きな役割や意味を持っている。中途失聴者や難聴者の多くは、まだ同障の仲間の存在も知らずに、社会の片隅の周囲が健聴者ばかりの中で、補聴器を命綱にしたり、聞こえにくいながらも必死で聞いて頑張っている。集いが開催されることを広く世の中にアナウンスすることは、まだ出会っていない同障の仲間に私たちの存在が届くように発信することになる。また、一般市民の方々に中途失聴者や難聴者の存在を知ってもらうことにもつながる。以前から 23 区と多摩地域の交互に集いを開催してきた。どこで開催しても、遠いとか寒いとかなかなか良い条件が揃うことは少ないが、ぜひ誘い合って参加していただきたい。もっともっと皆で力を合わせて、私たちの存在を強くアピールしていきましょう。